

花柳寿南海先生事情聴取

平成20年2月26日午後6時～午後9時45分@森・濱田松本法律事務所28会議室
出席者：花柳寿南海先生、花柳鳴介先生、松田、池村

(はじめに)

三世は、四世のことを誰にするか考えていたと思う。宗岳が三世に対し、四代目を決めてくれと三世に対して言っていた。宗岳は二世壽輔の頃から（三世を）よく知っているから、色々と三世から相談を受けていた。今、宗岳先生がご存命であれば、色々参考になる話が聞けたと思うと残念である。

三世は色々気が変わる人ではあった。頭が良い方だったので、ご親族間の様々なことを承知しており、「この人に四世に決めたらこうなるだろう。この人に決めたらああなるだろう。」ということ色々探っているうちに、四世を誰にするか決めかねていて、そうこうしているうちに亡くなってしまった。

(後見人について)

二世壽輔から、「若葉を三世にしようと思うのだがどうか。」と相談されたことがある。わざわざ相談をしてきたのは、その頃三世は踊りが嫌いで、オペラ歌手を志望していたからだと思う。私はその時、「お嬢さんが三代目になるのが一番いいのではないか。」と述べ、これに対して二世壽輔は、「流儀の3分の1は付いてくると思うから、よりこに継がせようと思う。」と言っていた。

二世壽輔が壽楽と花柳寛を三世の後見人にしたのは、三世は踊りが好きではなかったからである。二人はその頃から踊りの腕が凄く、また、花柳寛は大阪に顔が利くことから、二人を後見人に入れておけば流派の分裂をある程度避けられるとの配慮だったのではないだろうか。

(花柳分家について)

二世芳次郎（二世壽輔）は初代壽輔とツルとの間にできた、初代が70歳頃の子である。後にツルは初代壽輔の養子になったため、ツルと二世芳次郎（二世壽輔）は、母子でありながら、戸籍上は兄弟になっている。

二世壽輔の妻貞子はツルを大事にしており、ツルは厳しい人で強い権力を持っていた。しかしながら、後に、ツルと貞子に対立するという構図になる。

二世壽輔をサポートさせるため、ツルは、四世芳次郎（幾太郎）を養子にしたのだが、その際、ツル自身「この養子縁組が後に災いの元とならなければよいが…」と言っていた

1 二世は姓名判断を重視し、そのため、三世を色々な呼び名で読んでいた。若葉→わかば→いくよ→若葉→よりこ

ようだ。なお、幾太郎を養子にしたのは、特に踊りが巧かったからという理由ではなかった。この幾太郎が花柳寛の父親である。幾太郎は、後に芳瞳を名乗り、花柳寛に五代目芳次郎の名を譲って大阪へ行くことになる。

ツルには二世壽輔の他に、もう一人子供がいたが、踊りとは無関係で、違う名前でも別業界で生活している。

二世壽輔は、最初の妻とは離婚をし、二人目の妻とは結婚直後に死に別れ、貞子は三人目の妻である。

(赤坂の分家について)

初代壽輔が亡くなった時、二世壽輔はまだ10歳位だったため、初代の甥である花柳徳太郎が、初代壽輔と二世壽輔の間、流派を守り、家元としての仕事を果たした。

二世壽輔は、親族会議により、一度は質屋に丁稚奉公に出されることになったが、「富輝楼のおクラさん」が、二世壽輔を預かることになり、歌舞伎役者・尾上梅幸のところで修行をさせ、後に尾上菊太郎と名乗った。その後、18頃に築地に戻り、当初徳太郎の代稽古として家元としての修行をし、その間はツルと徳太郎が流派を仕切っていた。

(大阪での分派騒動について)

二世壽輔は東京で芝居の振り付け、花柳研究会等の業務で多忙になったので、大阪を始めとする地方に行くことができなくなり、結果、代稽古に地方を任せることになった。その四世芳次郎もそのうちの一人であり、四世芳次郎は大阪に活動の拠点を移し、そこで地盤を固めることとなる。大阪においては、東京のように何日も稽古をするやり方は嫌われるため、もっと稽古を減らした方がよいと寿魁の父親が進言し、四世芳次郎はこれを実行した。また、給金も大阪の方が東京とは比べものにならぬ程、高かったため、支持者を集めることとなる。

四世芳次郎は大阪が気に入り、東京には殆ど寄りつかないようになった。そのまま大阪に居着くこととなり、八重子とは別の女性と暮らすようになる。なお、四世芳次郎と八重子の間には、やすこ、寛、芳松(=雅一。後に芳瞳)、育子の四人の子供がいる。

「大阪の乱」の際、これを支持する大阪の名取は、花柳寛を頭にして大阪花柳流を旗揚げしようとした。その時に、花柳寛は、皆の前で頭を下げ、「自分はそういうのは頭がないし、二世壽輔にも恩があるので、申し訳ないができない。私の代わりに芳松を頼む。」と述べた。二世壽輔は、花柳寛の父である幾太郎に、「これからは学問が大切。寛は勉強したがつているのだから大学へ行かせたらどうか」と諭し、これにより花柳寛は大学進学が叶ったことから、二世壽輔に恩を感じていたのだろう。

芳瞳派は、戸籍名が「花柳」であるので、名取名も「花柳」で、と三世に申し向けたところ、三世はこれを断り、別の名称にするよう指示した。結局芳瞳派はこれに従わなかつ

たため、仮処分に至ってしまった。四世芳次郎の妻である八重子が大阪で旗揚げをすることを宣言すべく、築地に乗り込み、三世にその旨宣言をした。寿南海はその場にいた。

やはり名取名は「花柳」がいい、という者は、芳瞳を寝返り、結局花柳流に戻っている(今の理事にもいる)。

芳瞳流の音頭をとっていた者は寿魁と仲が悪く(勢力争い)、寿魁は旗揚げについて相談も受けていなかったが、結果的に寝返り者を寿魁が花柳に呼び戻した格好になった。

今般、芳瞳流に縁がある五世芳次郎が花柳寛となったことから、流派の中には、「芳瞳流が花柳流に戻ってくるのでは?」と言っているものもいるくらいである。

四世芳次郎(芳瞳)に大阪花柳を任せたのは、「分家一代限り」であって、芳瞳が亡くなれば分家という扱いはなくなるということになっていた。

花柳寛は「大阪の乱」の際には三世の後見人だったが、何ら流派のために協力をしてくれなかった。花柳流にも芳瞳流にもどっちにもつかず、コウモリのように様子見をしていた。もし花柳寛が説得をすれば芳松(雅一)も分派に動かなかったはずである。大阪の乱以後暫くの間、花柳寛は、いつ芳瞳流に寝返るか分からないという理由から、特に大阪で無視されていた。

(花柳寛と三世の関係)

花柳寛が三世の婿として二世の養子になるという話もあったが、花柳寛は女性に興味がない(羽田離婚をした前歴がある)ので、結局破談をした。

三世の後見人としての仕事は、要するに振り付けをしたり、三世と一緒に踊ったりすることであり、二世が指示をしていた。

花柳寛は三世の代稽古に一切関与しておらず、理事にも就任しなかった。一方、壽楽は私的なことや流儀なことにつき厳しく指導をし、花柳寛にも同様の態度をとっていた。

(三世の次期家元に対する意思)

寿南海は、三世が生きていれば花柳寛を決して四世にしていなかっただろうと思う。

一方で、三世自身、四世を誰にするかにつき、次世代の人材で色々模索をしていたが、決定的に誰かと決めてないのではないかと。

錦之輔については、三世と壽楽との軋轢が一番の原因で、錦之輔本人も築地にいられなくなったのだと思う。女性問題という話も一部あるようだが、そんなことは大した問題ではない。錦之輔は、踊りや小道具のこと等で、「築地ではこう言われるが、青山ではこう指示される…」と常日頃悩んでいた。多恵子が錦之輔を四世家元にするという三世の証文を持ってるかどうかは知らない。多分無いのではないかと。多恵子自身、「皆が納得する人で落ち着いて欲しい」と言っている。

貴彦に関していえば、三世は貴彦を勉強させるため、まだまだ踊りは未熟であったにもかかわらず、色々踊りの経験を積ませていた。貴彦と組んで踊らされた流派の人間は皆、

貴彦を四世にするのだと思っていた。

(青山家について)

壽楽には二人の息子がいるが、タイプが全く異なる。二代目錦之輔は両親が全く不満を抱かないエリートタイプであった。一方の嶽(良彦)は頭は良いが、子供の頃から物事を外から見るタイプであり、両親ですら、若干警戒していたようだ。そのため、二代目錦之輔は踊りの世界へ入れ、嶽に関しては、大映に頼んで役者にした。ただ、当時から二代目錦之輔と嶽とは一緒に踊ってはいた。

良彦は両親と同居していたが、しっくりいかなかったようだ。特に、良彦の娘・瑞江(貴彦の姉に当たる。なお、瑞江の夫は宮大工である。)が、祖父である為江のことを好きではなく、為江が瑞江に対し、学校卒業後は踊りの世界に入るように言ったところ、これに反発して勤め人になった。為江はこれが気に入らず、二人の間で喧嘩が始まり、これを契機に嶽は外に家を買って、同居は解消となった。貴彦は、壽楽家と疎遠になり、清水建設に入り、サラリーマンとして生活していた。

四世候補として貴彦に三世から声が掛かったのは間違いない。嶽は周りからは嫌われていたが、三世は嶽を信用しており、法事のことや身の回りのこと等を嶽に相談していた。三世にとって嶽が支えだったのかもしれない。

三世は寿南海に、「貴彦は性格もいい。あんたに稽古をつけてもらいたいが、そうすると壽楽が翫一(=寿南海の息子)を虐めるだろうから、あんたに任せられない。錦輝²(きんてる)にやらせる」と言ったことがある。

結局、三世は、寿彰、壽一美、喬輔に貴彦の稽古をつけさせた。この三名は、いずれも壽楽からはある程度距離がある者達である。

ただ、三世が貴彦のことを目をかけて稽古をしていた事実はあるものの、四世とはっきり決めていたわけではないのではないのか。勿論、色々なことを貴彦に教えているのを直に見ていたので、「四世は貴彦かなあ」という感じで周囲は受け止めていた。

壽楽一周忌の後に三世が四世として指名するつもりだったのはおそらく貴彦だったのであり、その意味では三世の内心は(貴彦に)固まっていたのだろう。

もし三世が四世を貴彦にする場合、自分が三世就任の際にされたように、誰かを貴彦の後見人にしたと思う。ただ、誰を後見人にしようとしていたかは分からない。流派内で新家元を発表する方法は特に決まっていたのではないのか。三世のときは何となく、舞台前の楽屋で聞かされたような気がする。

(三世の病状について)

三世は、高野山の法事の際、風邪で具合が悪いということで、食事をせずに東京へ帰っ

² 花柳錦輝…壽楽の内弟子(代稽古も)。良彦の育ての親的存在。代稽古をやめて嶽と青山から出た。貴彦は錦輝に教えた。

たところ、翌日倒れ、聖路加病院に入院した。この際、三世が病院に呼んだのは花柳寛ではなく嶽であった。花柳寛は、「僕のところに何も言ってこないのよ。聖路加に入院したのに（すぐ近くの新富町に住む自分と呼ばないで）良彦（嶽）を呼んだ」と怒っていた。そのことを三世に伝えたところ、「あの人（花柳寛）は血を見たら動転するからダメだ」と言っていた。三世が最期まで近づけてたのは嶽夫婦だろう。嶽は看護師ともよく会っていたようだ。

重い病態については理事会に全く情報が入ってこなかった。

（三世死亡当日からその後の様子）

当日（平成17年5月23日）、稽古場から瀧藏に電話をしたところ、「ご遺体がまだ来ない」と言われ、「えー、そんなとこまで行ってたの?!」と驚き、すぐに寿美と一緒に築地に帰った。もう少し早く知らせたかった。

当日、理事会は開かれていない。瀧藏が、喪主を決める会議に出席し、喪主が花柳寛に決まったということを瀧藏から聞いた。この会議に誰が出席したのかは分からないが、親族はいたのだろう。

四世を誰にするかということは24日夜に話し合われた。この話し合いは、理事会として召集されたものではない。

出席したのは、寿魁、瀧藏、寿南海、花柳寛、寿々であり、その席で瀧藏が「秋田弁護士がすぐにしないとまずいと言ってるので、一両日中に次期家元を決めなければならない。身分もあるし色々あれだから、花柳芳次郎氏を四代目に推挙する。」と言った。寿南海としては、正直「え?」と思ったが、花柳寛は三世の唯一の後見人なので、一時でも何でもその方が無難だと思った。なぜなら、そうしておけば大阪は離れることはないからである。それで、なんとなく「うんうん」という形で花柳寛の線になってしまった。ただ、寿南海としては、「四世を貴彦にするなら脇を固めない」といったことは発言しているはずである。この時に寿魁が、四世は花柳寛、五世は貴彦という意見をいったかどうかは記憶にない。

花柳寛は、「自分は今までそういう生き方をしてきてないから、一晩考えさせてくれ」と述べた。寿魁は花柳寛が四世家元になることは、大歓迎であったと思う。なぜなら、大阪での権力が揮えるようになるからである。大阪の乱以降、大阪の名取は引け目を感じており、事実、今般の花柳寛の四世就任を受け、大阪の名取には、「我々にもやっと光があたる」と言っている者もいるそうだ。

寿魁は、花柳寛を説得すべく、当日、花柳寛宅を訪ねたようだ。

多恵子も錦之輔も典幸も友も来ていたが、「青山の人はいいのよ」と言われたようだ。

（花柳寛の家元受諾）

5月25日、花柳寛が家元就任を受諾する意思表示をした。その時同席したのは、瀧藏、

寿南海、寿魁…それほど理事は揃ってなかったように思う。その席上で花柳寛は、「五代目は貴彦にすることを承認してくれと良彦が自分のところへ来たが、自分はその話を蹴った」と言っていた。花柳寛は、青山良彦の事も、そして貴彦の事も、好きではなかったようだ。東京會館で「良彦も嫌いだが貴彦も嫌い」と花柳寛本人が話していたのを覚えている。

(総会前日の青山良彦とのやり取り)

今年の総会前日に青山良彦に電話をして、「あなたの気持ちも分かるけど、流儀のことを考えて物言を言ってね。親族で色々あるのかもだけれども、末の人はそんなこと知らない。地方のことはちんぷんかんぷんでただ動揺するだけ。それに地方で面白半分は何言われるか分からない。」という趣旨のことを伝えた。

それを受けた良彦は、「分かりました。寿南海先生だけですよ、流儀のこと考えてくれるのは。他の人はみんな自分のことばかり。親戚同士の話し合いはこちらでします。」と述べ、結局翌日の総会では一言も発せず、他の出席者と一緒になって拍手していた。

(現在の流派の様子、今後に関する寿南海の見解)

若い名取達の一致した意見は、「四世は花柳寛でよいが、次世代のことを考えたときに、(花柳寛の孫である)創右に(五世家元の座が)行くのは嫌だ」というものであり、おそらく大阪の名取達も同じ意見ではないだろうか。

寿南海の意見としては、今般の四世は理事会が決めたことになっているのだから、五世家元も、そしてその次の代の家元も、今後は家元ではなく理事会が決めることにすればよいと考えている。

一部に、「築地なんていない」という意見があるが、それはまずいだろう。築地の稽古場は流派の財産として絶対に残すべきである。

先のことは先のこととして、嶽(青山良彦)には我慢してもらいたい。そして、その代わり、花柳寛は三世の相続財産を諦めるということで、両成敗という形が望ましいのではないだろうか。

家元の在り方は昔と今とでは自ずと異なるものではなかろうか。四世は、やたらと地盤固めに急いでいるように寿南海の目に映る。

法人化は二世の頃から話は出ているが未だ実現していない。相続財産管理人の方から法人化等について四世や会派の皆に言って欲しい。そうすれば、流派内の意見として形成されると思う。

以上

花柳喬輔 (松本恭子) 平成 19 年 12 月 22 日 (土) @ 築地応接室

1 花柳喬輔は二世の弟子として指導を受け昭和 23 年二世家元から名取を許された。当時 17 才で壽一美 (大岡一江) と同期である。年齢が近く女同士ということもあって、喬輔、壽一美は三世家元と近い関係にあった。花柳流花柳会の理事に選任されたのも同時期であった。平成 18 年の 12 月頃家元 (事務局を介して) 新理事の就任要請があり、これを承けた。これまで花柳会の理事は家元が選任していたもので、総会で理事を選任して理事会で理事長を選任するという形はとられていない。

当時理事長 (宗岳) が理事長職にあったが近年出席はなかったようであり、喬輔が理事になってから出席はなく、理事長としての指示はなかった。実質は家元の補佐役であって一部名誉職でもあった。宗岳は本年 10 月 27 日死亡し現在理事長はいない。

どちらかと言うと、壽一美は家元の私事についても相談に乗っていて、喬輔は流派内の諸事について相談に乗るという関係であった。

2 三世が、後継を親戚筋の次世代から出そうとしていたことは間違いない。はじめに花柳友 (片岡智子) を養子にすべく築地に住まわせて養育していたのはそのためもあってのこととと思っていた。貞子の意向が強かったことは間違いないが、三世もこれと同じであったと思う。大変友をかわいがっていたことを覚えている。友が西川流御曹司 (西川箕乃助) と結婚しその後三世との関係も上手くいかなくなった。両流派の関係が原因にあったのだろうと思う。三世は友を離婚させて花柳に戻すという決断をしたのも両流派の関係であったと思う。

3 次に三世は典幸を後継とすべく平成 15 年ころまで築地に住ませ稽古をさせていた。内弟子とは食事 (時々家元と食事していた) もその他の扱いも別で、後継候補として扱われていた。典幸が築地を出ることになったのは三世と壽楽の関係ではなかろうか。踊り方もあるだろうが、壽楽の実力と家元家の格の対立がそうさせたのではなかろうか。家元は私の前では踊りは嫌いであるということ言うことがあり、実力は壽楽と比肩されるべくもなかった。三世は家元としての政治力のような力はあったが、芸は評価できないというのが本当のところ、流派内の者は口には出さないがそう思っていたところであろう。だから壽楽の存在は三世にとって大変大きなものであって、一説によると壽楽は家元に「典幸を後継とする」趣旨の文書を書かせていたという。今でもこれを多恵子が持っていると言われている。これについては多恵子に聞かれない。

4 典幸が築地を出るところになって、家元は後継を誰にするか悩んでいたのが判

った。平成17年5月頃からだったと思う。三世はこれまで貴彦の稽古を寿彰に命じていたのであるが、加えて喬輔にもこれを命じたので、貴彦を後継とする意思が確実であることが判った。この稽古は今でも続いている（喬輔の稽古場に貴彦が来る形）。6月ころ喬輔は貴彦の稽古の折、四世が決まりつつあるのだが、後継問題をどう考えているのか聞いたことがあった。貴彦は今のところ流派の芸の伝承に努めるという答えであった。

- 5 以上のように友、典幸、貴彦と次世代の後継を三世が考えて来たことに間違いはない。これは流派内者が皆同じように考えていたのである。従って今般寛が家元を継承するという事は、意外であった。どう決まったのかも実は理事である喬輔にも良く分からないところである。

5月24日の理事会では、正確な言葉は覚えていないが、瀧藏（代行）が寛で決めたという趣旨のことがあり、誰も発言しないまま決まったことになっている。たぶん皆は（喬輔も）寿南海が何か言うのではないかと（23日の会議に出ているから）と思っているうちに瀧藏の「これで行きましょう」という趣旨で決まってしまったというところである。寛は三世よりも4才年上であるからあくまでも次の世代に継ぐために急遽暫定的に決まったものと思っていた。

派内でも初めは寛で行こうと考えていたのであるが、これも次世代に継ぐための家元という意味で解していたのだった。ところが、宗岳の葬儀（11月13日）の折、葬儀終了後、親族、理事その他流派の主な方々を集め葬儀委員長として挨拶した。四世がこれからは自分の考えによって流派を運営することと青山家・片岡家は親族扱いをしない趣旨の宣明をした。場違いの発言とその内容に、皆はびっくりしたというのが実状である。流派の多くの者は、四世は暫定であって、そう遠くない（四世76才）五世継承が生じたときは、本来の親戚筋に返してもらえるものと思っていたからである。寛の「花柳家は家元の花柳家とは別であるということ」を全花柳流派の者は承知している。養子縁組を重ねて重ねて今に至っているし、寛には子供がなく、さらに養子縁組を重ねることになるからである。四世の家元として一人で決めるという発言は、五世問題も自分が決めるということを宣言しているのと流派の者は受け止めている。我々（喬輔、茂香、壽一美、寿太郎、志寿利の5名）は、このままでは、三世家元の意に反することになってしまうので、まずいことになったと思っている。寿南海も同じ思いだろう。そこで、次の理事長は寿南海になってもらい、瀧藏、四世による独断を阻止しなければならないと考えているところである。

- 6 寿南海は人間国宝でもあって流派内の実力者である。芸ごとでは一番であると皆が思っている人である。しかし三世、貞子は然るが故に寿南海を嫌うと

ころがあった。親戚筋でない者が人間国宝になるところまで芸を磨いたこと
がかえって危険視されたのであろう。寿南海ははじめ事務所の事務員として
入ったが、才能があったため、実力者になった。貞子・三世らにとっては「事
務員」という意識がどこかにあったのだと思う。血筋でない者が実力者にな
ることは、家元制度にとっては不都合であったのだろう。

ただ、流派内の者（親戚でない者）にとっては大変尊敬されている人物な
のである。だからこの花柳流の危機の状況を寿南海によって救ってもらいた
いという気持ちがある。喬輔は寿南海理事長になるよう対処したい。このた
めに四世から干されてもそうしなければならないと考えている。

- 7 三世が寛・芳次郎を頼りにするとか、心から信頼していたということはない。
ましてや四世を暫定的にでもやってもらおうと考えていたものではない。そ
の大きな原因は、昭和50年代の大阪花柳流創設問題がある。花柳流を二分し
て大阪に家元を立てようとした問題である。三世は訴訟を提起してこれを阻
止した。これを謀ったのは寛の父四世芳次郎ではあるが、寛が花柳流内にお
いて家元になれないために起こした反乱である。これを寛・四世が承知して
いないわけがなく、当時のことを知っている流派内の者は皆、大阪の反乱の
首謀は寛・五世芳次郎として見ているところである。四世として寛が立つと
いう状況を5月23日、24日に作ったのは、この大阪の怨念というべきなの
ではなかろうか。三世の立場で言うならば、絶対に四世にさせたくない人物
が寛であったということになる。三世の人生において、花柳流にとって大阪
の反乱は最大の問題であったというべき出来事であった。三世の意を汲むな
らば五世家元を親戚筋に返すということをしなければならないと考えている。

尚、三世は、大阪の反乱後地方に支部を設けても支部長を設けない直轄に
し、大阪には壽魁を配置して、反乱が生じないようにしたのである。

以上

花柳壽一美

平成 19 年 12 月 21 日（金）16:30 ~ @MHM 会議室

- 1 花柳壽一美（以下「壽一美」という。）は、平成 18 年 12 月三世家元から指名されて花柳流花柳会の理事になることの伝達があった。理事は、翌年平成 19 年 2 月から行っている。平成 19 年 1 月の総会において、理事の選任手続はなされておらず、三世家元の指名により理事となった。これまでの理事の選任はすべてこれと同じ方法であった。

壽一美は、三世家元が家元職に就いて以来、花柳流の中ではかなり近い間柄の付き合いであったことから、平成 18 年 12 月の指名になったものと考えられる。旅行などにも行き三世家元の話聞く機会が多かった。

- 2 花柳友を養子にするという話があったことは承知している。その後、西川流との縁談などがあり、三世家元は後継とまで考えるほどではなかったようである。

その後、平成 12 年頃から花柳典幸を後継とするために青山家から築地に移させて養成をしていたことも承知している。この段階では典幸を育てて四世家元にしようとしていたと考えられる。典幸が青山家に復帰することについては、詳しい事情は知らないが、三世家元と壽楽の流儀に関する考え方の違いがあったのではないかと考えている。

その後、三世家元が花柳（青山）貴彦を後継にしようと考えていたことは、折りにふれて聞くことがあった。また、流儀の行事や冠婚葬祭において、貴彦を然るべく扱いにしていたことも、貴彦を後継とすることについて三世の考え方があったのだと考えている。三世家元が壽一美と会話する又は電話する中で、貴彦を後継にすることを内心決めているということについて、具体的な話を聞くことはなかった。公然とこの話を人前でしたことはないように思う。何人か前にして伝えるという意味で貴彦を後見人にするという場面に出くわしたことはないように記憶している。しかしながら、「壽会」のプログラムにおける扱いや（貴彦の妻への）定紋の許しなどがあったことから、流派の中の者は三世家元の気持ちは貴彦で決まっているのではないかと考えるようになってきていた。貴彦の稽古を寿彰に任せたのも三世家元の指示であることは間違いない。

- 3 四世家元に決まった経緯についてできるだけ詳しく話すと以下のとおりである。5 月 23 日に主だった者の集まりがあったことは間違いない。親族以外の者としては瀧藏、寿南海、壽魁の 3 名が集まったと聞いている。この三名がそれぞれの案を持っていたようであるが、瀧藏が四世に芳次郎を、寿南海が四世に貴彦を推したということは派内の者はみんな知っている。私もこの

ことは聞いている。その翌日 5 月 24 日に理事会が開かれたのも間違いない。欠席が 2 名で 10 名の者が出席した。この時瀧藏から「芳次郎に決まったので、よろしく」と切り出されて、そういうことになったのだなあと思った。さらに瀧藏は「そういうことになったので、よろしく」ということで理事会決議があったことになってしまっている。格別の反対がなかったことも間違いない。しかし、何時何処で決まったかについては、何の説明もされていない。おそらく 23 日に親族と 3 名の瀧藏、寿南海、壽魁が出席したところで何らかの話があったのだと思う。しかし、この時はそういうものなのだろうなあと思ったが、今になってみると、これでいいのかという気持ちが起こっている。

- 4 その理由は、四世は三世より高齢であるところから本来家元を継承するというのはおかしいけれども、今次世代の血筋の方々が若いことから三世が急逝した後の暫定的な四世ということでは適当な人選と考えていたからだ。四世（寛）は花柳ではあるが血筋でないから、次世代五世は戻すのだろうと皆が考えていたのではなかろうか。

以上